

Title	アダム・スミス芸術論と18世紀民衆娯楽 地域経済の発展と近世農村舞台の展開(1)
Author(s)	後藤, 和子
Citation	経済論叢 (1996), 157(2): 48-63
Issue Date	1996-02
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/45045">http://dx.doi.org/10.14989/45045</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 經濟論叢

第157卷 第2号

---

哀 辭

故 飯野春樹元教授遺影および略歴

固有価値と人間ネットワークの形成……………池 上 惇 1

組織環境の特性とその意味付けの連鎖……………崔 俊 24

アダム・スミス芸術論と18世紀民衆娯楽……………後 藤 和 子 48

費用効果分析による医療資源配分について……………土 屋 有 紀 64

追 憶 文

飯野春樹先生が残されたもの……………庭 本 佳 和 80

飯野春樹先生を悼む……………田 尾 雅 夫 85

---

平成8年2月

京 都 大 学 經 濟 學 會

## アダム・スミス芸術論と18世紀民衆娯楽

——地域経済の発展と近世農村舞台の展開(1)——

後 藤 和 子

### I は じ め に

#### (1) 研究の目的

本研究の目的は、芸術や文化という人間や社会の精神的共通基盤<sup>1)</sup>となるものの価値をどのような価値として捉えるのか、その様な価値を実現するための社会・経済システムとはどのようなものかを歴史的に考察することである。

1980年代以降、大量生産システムから多品種少量生産システムへの移行や情報化といった経済活動のあり方の変化の中で、社会や経済における文化や情報の持つ意味が変わり始めた。物は単に使うって便利なものから、それ自体が文化的価値のシンボルとして人々に意識されるようになった<sup>2)</sup>。また、情報ネットワークの発達情報は情報による経済活動の制御の可能性を開いた<sup>3)</sup>。この様な変化

1) ウィリアム・ヘンドン氏(アメリカの文化経済学会会長)は、1990年の日本講演に於いて、芸術の価値について、オプション価値「世界の市民、コミュニティの市民として私たちは人類の所産としての芸術を保存することに協力する。自分自身が直接触れなくとも、人類ということを考えれば、それを保っていくことの重要性を認めること」であると指摘している。また、都市の衰退をくい止め、アメニティを高めて再活性化させる上でも芸術や文化の役割は大きいと指摘している。(アートサポート編集委員会編「アートサポート'90s」芸術協出版部、1991年、23ページ・33ページ)

2) 社会学ではよく使われる概念である。「私たちは、さまざまな商品をとおして自分自身を演出し、望ましい自分のイメージをアピールしようとする。これはいわば自己の情報化ということであり、のちに論じられるファッションの領域などに関係の深いテーマといえるが、この同じ自己情報化の問題を、対人関係やコミュニケーションという社会心理学の基本的な文脈でとりあげたのがアーヴィング・ゴフマンである。」(井上俊編「現代文化を学ぶ人のために」世界思想社、1993年、9ページ)

3) 情報経済学でよく指摘される点である。「経済は基本的に分業のしくみから成り立ってお

は消費者の文化的欲求が経済活動を制御する社会への変化と考えることもできる。総理府の世論調査でも1976年以降、物の豊かさよりも心の豊かさを重視する人々が増えており、その傾向は年々強まってきている<sup>4)</sup>。こうした変化を考えると、文化や情報といった人間や社会の精神的共通基盤をぬきにして経済活動を論じることは困難になるであろう。社会や経済を制御する文化や情報を内包する制御システムとして社会や経済活動を分析する必要性が生じてくると思われる。ところが、文化や情報は従来の市場財とは異なり、価格を持たず、個人の所有に全てを還元できない財である場合が多い。これらは、公共財と呼ばれ市場ではやりとりされれない財として議論されてきた。しかし、文化は部分的には価格を持つ市場財として存在するし、社会の情報化により市場財として取引される量も増えつつある。例えば、舞台芸術の費用は一部はチケット価格で賄われるが、その舞台芸術の創作までに要した費用の全てをチケット価格で賄う訳ではない。その背景には、舞台芸術の便益は個人や、現在という時間を超えて広がる可能性があり、誰がその費用を分担すべきかという難しい問題が存在するからである。こうした財について議論をするのに一部は公共財として、一部は私的財としての枠組みで個別に扱うのではなく、もっと包括的に議論するための枠組みが必要である。

ボウモル・ボウエンはその著「舞台芸術・芸術と経済のジレンマ」の中で芸術の価値を公共財と私的財の混合財と規定している<sup>5)</sup>。芸術はそれを創造し享

り、そのような分業に人々を配置するのも市場機構の仕事である。」「最近スタンフォード大学の経済学者であり、技術史家であるネイザン・ローゼンバーグなどが説得的に説明しているように、分業は新しい情報を生みだし、それによって分業と分業の連結をつくりだすという動的な側面をもっており、この点が強調されるべきである。」等、経済の発展に伴い情報によるその制御の面が増大することが指摘されている。(今井賢一監修 情報とシステムPART1「経済の生態」NTT出版、1987年、36ページ)

4) 総理府「国民生活に関する世論調査」による。1994年には、心の豊かさ重視が57.2%に対して、物の豊かさ重視は27.3%である。

5) William J. Baumol & William G. Bowen, *Performing Art The Economic Dilemma*, 1966, pp. 382-386, 池上惇・渡辺守章監訳「舞台芸術 芸術と経済のジレンマ」芸団協出版部、1994年、496-500ページ。また、この著書の意義と課題については、後藤和子〈舞台芸術芸術と経済のジレンマ 現代的意義と課題〉地域文化環境経済研究会 Circular Volume 2 No 4 1994年を参照。

受する個人に所属する私的な財であると共にそれを超える社会的便益があると  
する立場である。彼らによる芸術の社会的便益の根拠は次の通りである。

- ① 舞台芸術が国家に付与する威信
- ② 文化活動の広がりが周辺のビジネスに与えるメリット
- ③ 将来の世代のために（芸術水準の向上，観客の理解力の発達）
- ④ コミュニティにもたらされる教育的貢献（マス・メディアの訓練の場と  
しても）<sup>6)</sup>

それぞれが、違ったレベルでの公共性の指摘であることは一目瞭然である。こ  
れらの公共性についてはその形成のプロセスをふまえて〈どのようにして〉そ  
の公共性が形成されたかが検討されなければならない。これが、第一の論点で  
ある。

また、ボウモル・ボウエンによる混合財という提起は芸術・文化の価値を考  
察する際のポイントとなると思われるが、公共財的側面と私的財的側面の関係  
については明らかにされていない。これが、第二の論点である。

以上二つの論点を軸に、社会の中で芸術・文化の財としての特徴がどのよう  
に形成されてきたのかを歴史的に分析し、今後芸術や文化を支える社会・経済  
システムがどうあるべきかについての若干の考察を試みたい。

## (2) 研究の方法

芸術や文化の価値について考察した経済学者はあまり多くはない。芸術や文  
化が経済の範疇外におかれていたためである。芸術に論及した古典的経済学者  
としては、アダム・スミスとラスキンをあげることができるが、ここでは、後  
に考察する18世紀民衆娯楽の時代の終わりに生きて芸術を論じた経済学者とし  
てアダム・スミスの芸術論をとりあげたい。アダム・スミスは道徳感情論、国  
富論に続いて芸術論を展開する大きな構想を持っていた様であるが、その完成

6) 同上, pp. 382-386, 日本語訳, 496-500ページ。混合財の分析の中で公演参加者に直接的便益  
を提供するだけでなく、共同体に便益を提供するとして4つの便益をあげている。

を見ずに亡くなっている。遺稿として残されたスミスの「芸術論」<sup>7)</sup>と国富論の中から、スミスが芸術の価値をどの様なものとして考えていたのか考察し、スミスの存命していた時代のイギリスにおける芸術・文化と社会との関係について検討したい。スミス存命中のイギリスにおいては芸術や文化がまだ人々の生活の中であって共同性を具現していたからである。つまり、産業社会以前と産業社会以後にあっては、芸術・文化の価値のあり様に変化してくるのである。18世紀イギリスばかりでなく、近世と言われる時代の民衆娯楽の中には芸術文化の公共財的側面と私的財的側面が未分化な状態で組み込まれていた。そのあり様を社会・経済システムとの関係で明らかにするのが序論としての本稿のテーマである。

## II アダム・スミスの芸術論及び国富論における 〈芸術への支出〉の意味の検討

アダム・スミスの芸術論については、「続アダム・スミスの味」<sup>8)</sup>の中に山崎裕氏の論文「アダム・スミスの芸術論をめぐって」がある。山崎氏によれば、スミスの芸術論の本質は〈芸術は模倣ではなく創造である〉という点にあるとする。「芸術的感銘が単純な模倣にないことを暗示したうえで、かれは絵画についてつぎのようにのべています。「絵画では、ひとつの平面が他の平面に似るように制作されるだけでなく、物体の立体性に似るように制作される。一方、彫刻ではひとつの物体が他の物体に似るように制作される。したがって模倣するものと、模倣されるもののあいだの不一致は、後者におけるより前者の方がはるかに大きい。そうして模倣から生じるよろこびはこの不一致が大きければ

7) Adam Smith, "Of the Nature of that Imitation which takes place in what are called The Imitative Arts", in *Essays on Philosophical Subjects, The Glasgow Edition of The Works and Correspondence of Adam Smith*, 1980, この翻訳は、①馬淵 貞治訳「アダム・スミス芸術論」日本経済評論社、1992年12月②アダム・スミスの会監修「アダム・スミス哲学論文集」(いわゆる模倣芸術においておこなわれる模倣の本性について)名古屋大学出版会、1993年3月 ③佐々木健訳「哲学・技術・想像力」八篇(いわゆる模倣的諸技芸において行われる模倣の本性について)勁草書房、1994年3月、がある。②はグラスゴー版の翻訳ではなく原典の翻訳となっている。

8) アダム・スミスの会/大河内一男編「続アダム・スミスの味」東京大学出版会、1984年。

大きいほど大きい。」ここにいう「不一致」、あるいは懸かくこそがスミス固有の論理として注目すべき概念であり、この「不一致」の介在こそが模倣を芸術的感銘にたかめるか否かの決め手となるわけです。<sup>9)</sup>「器楽論は第二部の主要部分であり、かれの芸術論の核をなしている部分だとも思います。」<sup>10)</sup>「強調されるのは主導音を中心とする諸音の『結合』と『親和力』、それにタイム・アンド・メジャーというリズムです。前者によってさまざまな音の『結合』による器楽の独自の力を、後者によってリズムの変化によるところよさ、『記憶』と『予言』のたのしみを提言しているわけです。」<sup>11)</sup>そして、この器楽論の中に国家論との符合を見い出している。「『器楽の巧妙につくられた協奏曲』は、『国富論』の『よく統治された社会』に対応していて、前者では諸音のひびきの『多様性』と『結合』のなかに『固有の力』がうまれるのですが、後者では『分業の結果として、いっさいのことになった技術が生産物を多量に生産し、普遍的富が最下層の人々にまでゆきわたる』ことになります。」<sup>12)</sup>

この山崎氏の見解にあるように、スミスの芸術論は、アリストテレス以来の〈芸術は模倣である〉という論に異論を唱え、芸術の本質を対象との不一致や、音楽であれば音の多様性と結合の中に生まれる固有の力に見いだした点で大変優れている。山崎氏も述べているように、19世紀、20世紀の芸術を見通した卓抜な内容を持つものである。更に、スミスの芸術論の特徴をつけ加えてまとめれば以下の様になる。

#### 〈アダム・スミス芸術論の3つの特徴〉

スミスは道徳感情論、国富論の研究の成果の上で芸術論を展開しようとしたのであり、方法的基礎には先の2つの研究があると思われる。道徳感情論における慈愛と国富論における利己心はアダム・スミスにおける哲学的矛盾として

9) 同上、45ページ。

10) 同上、52ページ。

11) 同上、56ページ。

12) 同上、59ページ。

よく問題になる箇所である。しかし、道徳感情論におけるスミスの慈愛は、多様な個人が社会的経験を通じて他人の立場や感情を理解する同感を基礎にしたものである。個人は、同感により、社会における様々な個性を持った自分や他の人々の位置や役割を自覚して社会を構成する。一方で、国富論においては、その研究対象を物質的富に限定したために個人は同質な欲求をもつ経済人として存在することになる。こうしたスミスの立場から言えば、社会を構成する要素として同感やそれに基づくコミュニケーションは基本的な要素と考えられる。芸術の起源がコミュニケーションにあり、コミュニケーションにとっても芸術が根元的意味を持つことを考え合わせると、芸術論において、スミスは芸術をフリルではなく人間諸活動にとって本源的なものと考えていたのではないかと思われる。これが、スミスの芸術論の第1の特徴である。

2番めの特徴は、スミスが芸術の固有性をみごとに分析したばかりでなく、芸術の発生過程について歴史的考察を試みていたことである<sup>13)</sup>。無意味な音声や動作が、共同生活の中でのコミュニケーションの欲求と必要から意味を表現する歌やダンスや絵画に変わる。これらは、何らかの意味を表現しようとすることから、模倣芸術とスミスは呼んでいる。更に、芸術はそれ自身で意味を持

13) 「アダム・スミス哲学論文集」の解説347ページで水田洋氏はこの点に関して、スミスが「哲学的歴史の著作にとりかかっている」と1785年のロシュフォーコーあての手紙で書いているが、それはむしろ修辞学、文体論講義ノート及び言語起源論であって、芸術論等3論文には、歴史的観点は皆無ではないまでも、強く表明されていないとしている。しかし、芸術論に於いても、模倣芸術の起源についての論及「その後いくつもの時代を経るあいだに、そうした無意味な語の代わりに、もしそう呼んでよければ、音楽的な語の代わりに、何らかの意味ないし意思を表現する語。しかも、その発音が曲の速度および拍子に、従来の音楽的な語の発音以上に正確に一致しようするような語が使用されるかもしれない、といった事態が必ず生起するはずであろう。こうして韻文ないし詩が発生することになる。」(佐々木訳213ページ)(同様の主旨は、馬淵訳54ページ、スミスの会/哲学論文集169ページにもある)、芸術の本源性への論及「食欲が満たされた後に生まれる楽しみとしては、音楽とダンスが人間にとっては、何よりの自然の恵みであったと言うべきで、他にはないようにも思われる。即ち、芸術というものが発生し、進歩する過程では、まずこの二つが、恐らく人間発生の初め、あるいは、草創期に、人間が自ら見出した娯楽だったのである。」(馬淵訳48-52ページ)「人の声は何と言っても当の人には、一番心地良いものである。だから〈声帯が〉人類にとって、最初のあるいは草創期の楽器となったのは、自然なことであった。」(馬淵訳48-52ページ)(同様の主旨は、スミスの会/哲学論文集167-169ページ、佐々木訳では211-213ページ)があり、これがスミスの〈模倣であって模倣でない芸術〉の基礎にあると思われる。



つ（模倣から遠い表現）へと発展する。スミスの芸術論の根底には、社会の発生以前の共同生活における愛の表現としての先験的芸術、社会の発生と符合する模倣芸術、分業による社会の複雑化に符合する模倣ではない芸術という様に芸術を発展的に捉える着想があったのではないかとと思われる。

3番めの特徴は、これら芸術の発生過程の分析に交換概念を適用していることである。交換概念は、スミスの道徳感情論、国富論を通じた基本的概念であり、方法的基礎ともなっている。スミスにおける交換は、市場での物質的富の交換にとどまらず、個人の多様性を前提にしたルールの合意を含む広い意味での交換であり、社会秩序を自生的に創りあげる作用としても考えることができる<sup>14)</sup>。スミスは、模倣芸術を目的原因の作用、〈模倣から遠い芸術〉を作用原因の効果による芸術と分析している。作用原因とは、見えざる手、つまり、自生的作用のことである。様々な楽器がお互いの音の響きを聞き合いながらハーモニーを奏でていくのは作用原因の効果という訳である<sup>15)</sup>。

つまり、スミスの芸術論は、人間の先験的能力に基づき模倣を媒介して芸術の固有性に至るといふ点にその特徴がある様に思われる。山崎氏の指摘する

14) スミスの交換概念を経済学的方法論的基礎として立憲的経済学の中に位置づけているのはブキャナンである。J. M. ブキャナン著 加藤寛隆訳「コンスティテューショナル エコノミックス」有斐閣、1992年、p. 5, p. 10, p. 14, pp. 27-28, を参照。「アダム・スミスは境界を設定した。われわれは、経済的行為者に慈悲心を要求したり、あるいは政治的主体による明示的な指示を必要とせずに、経済がどのようにしてわれわれの目的の達成を組み込んだ秩序の型を生み出すかを理解し、説明することを、われわれに割り当てられた役割とみなす。市場の自生的調整の原理は、われわれの学問に独特の原理である。」

15) 馬淵訳11ページと佐々木訳237-238ページでは、模倣と観察と訳されているが、スミスの会の訳192ページでは模倣と遵守となっている。グラスゴー版の英語は、observation。「but it is by producing upon the mind, in consequence of other powers, the same sort of effect which the most exact imitation of nature, which the most perfect observation of probability, could produce. To produce this effect is, in such entertainments, the sole end and purpose of that imitation and observation.」[「器楽に於いては、自然の最も正確な模倣や蓋然性の完全な観察と同じ効果が、(模倣とは異なる)他の諸力の結果として人の心につくりだされるであろう。器楽に於いてこの効果を生み出すことは、その模倣と観察の唯一の結果であり、目的である。】(原文の私訳)つまり、器楽の効果は作用原因によって生み出される効果だということである。模倣は、模倣自体を目的とするから目的原因による作用であり、器楽は他の諸力の結果として模倣と同じ効果をつくり出すから目的原因による効果である。作用原因と目的原因については、水田洋「アダム・スミス研究」未來社、1968年、118ページを参照した。

「多様性とその結合の中に生まれる固有の力」「芸術は模倣ではなく創造」であるという芸術の特徴は、先験的能力と模倣を内包するもので、むしろ〈模倣であって模倣ではない〉という構造が芸術の特性として捉えられていたのではないか。芸術の本源性は、人間存在にとって根源的だということと、芸術の固有性の中にそれが再現されるという2重の意味を持つ。芸術の固有性の基礎としての芸術の本源性への認識は、芸術の価値の考察にとって大きな意味を持つと思われる。

次にスミスが「国富論」の中で芸術文化への支出について述べている箇所について検討したい。山崎氏は、スミスが芸術文化への支出を国家統治のための手段として捉えていたと述べている。「民衆教育が労働力の育成と社会秩序の保持のために国家の仕事となる。」<sup>16)</sup>

スミスが国富論において芸術に論及した箇所はいくつかある。まずは、少年教育施設の経費についての中である。「これ等古の聖人の彼等の祖先の施設に対する尊敬が、かれ等をして、それ等の社会の最古の時代から、相当の文明に達するまでの間、引き続き断続することなくしてつづいてきた、恐らくは、単なる古い習慣に過ぎないものうちに、豊富な政治的叡知を発見せしめたものであろう。音楽と舞踊とは、殆どすべての未開国において、その大切な娯楽であり、そして、彼の社交上の歓待として何人にも適すると考えられる大切な教養である。」古代ローマでは、ギリシャのような体操と音楽の教育がなかったがローマ人の方がむしろ道徳性において優っていた、それを支えた社会システムの1つが習慣としての芸術である、という文脈である。つまり、娯楽としての芸術、生活の中の芸術が公私の生活における道徳性に及ぼす影響について言及している。スミスにおいては、太古の時代から芸術は生活の中であって人々の同感の基礎、道徳性の基礎をなしていたと洞察されている<sup>17)</sup>。

16) 山崎裕「安価な政府の基本構成」信山社、1994年、99ページ。

17) Adam Smith, *An Inquiry into The Nature and Causes of The Wealth of Nations II*, 1904, pp. 261-262. 大内兵衛訳「国富論」(四)岩波文庫、昭和32年、第5編第1章、169-171ページ。/大内兵衛・松川七郎訳「諸国民の富」(四)岩波書店、1966年、146-148ページ。

二番めは、あらゆる年齢層の人民の教育施設に関する経費についての中で、「下層社会の人物はいかなる社会においても貴顕でありようがない。それでもかれが田舎の村落にいる間は、まだ、彼の行動に注意する人もあり、彼自らもそれに注意しなくてはならない。この境遇では、そしてこの境遇にある限りにおいてのみ、彼は、まだ、いわゆる『失うべき人格』を持っているのである。しかし、いったん大都会に出れば、彼はもうろう暗黒の世界に沈りこんでいるのである。彼が何をやろうがそれを見ている者もなく注意している者もない、それ故に彼自らそれに注意をはらわず、おのづから卑俗な放しと不品行の限りをつくすことになる。」そのため狂信に陥る危険があり、それを防ぐ方法は、「第一は、科学及び哲学の研究であり」「第二の救済策は民衆娯楽の頻度と面白さを増すことである。絵画、詩、歌、音楽、舞踊によって民衆を楽しませその気を晴らさせるべく、営利の目的を以てこの事業を企てる人に対しては、それが誹謗または無礼にわたらぬ限り、それを奨励し、即ち、それに完全な自由を与え、また、諸種の演劇及び上演を許すならば、国家はそれにより、常に大衆の迷信と狂信の温床たり易いかの憂鬱と陰気な気分を、容易に国民の多数から追い払うことができるであろう。」と述べている箇所である<sup>18)</sup>。

更にもう一箇所、分業が人間に及ぼす影響を述べた所がある。「分業が進むと、労働によって生活する人々のうち遙かに大部分を占める人々、即ち、人民の大多数の職業は、極めて簡単な、時としては僅かに1、2の作業に限られるようになる。そしてこれ等大部分の人々の理解力は当然彼ら日常の職業の内に形成される。そしてその一生を極めて簡単な作業、その作業の結果もまた恐らく同一であるかまたは同一に近いような作業に過ごす男は、決して起こってこない困難を取り除くための方法を発見する上に彼の理解力を働かせ、もしくは、発明力を働かせる機会を持ち得ない。そこで、自然、彼はそういう働きをする習性を失くし、およそ人間として成り得る限り愚痴蒙昧の徒となる。」<sup>19)</sup>

18) 同上、pp. 280-281、大内兵衛訳 第5編第1章213-214ページ。

19) 同上、p. 267、大内兵衛訳 第5編第1章 182-183ページ。

それ故、スミスは分業や都会での生活によって失われた人間性を補整し社会秩序を維持するための支出の一つとして青少年や成人のための科学や哲学（これは主として中流以上の階級のため）、そして民衆娯楽のための施設を国家の支出として位置づけた、というのが通説である。つまり、力点は、国家による社会秩序の維持におかれており、山崎氏の位置づけもそうである。しかし、スミスは人間諸活動にとって芸術は本源的意味を持つと捉えていたことから考えると、芸術への支出は単なる国家統治のための手段ではなく、本来人間や社会にとって必要なものへの支出と考えていたのではないだろうか。スミスは18世紀に生きた人であり、18世紀後半の産業革命初期のイギリス社会の混乱と変貌を日の当たりにしたはずである<sup>20)</sup>。産業革命以前の社会には、広く豊かな民衆娯楽が存在した。民衆娯楽を支える社会・経済的基盤が存在したのである。ところが、資本主義的農業の発展と都市の工場制度によって民衆娯楽はその存立基盤を失いつつあった。新たに国家によってその支出が位置づけられなければならない理由がここにある。

スミスは芸術論とりわけ器楽論の中で、芸術として完成度の高い器楽曲の本質に言及しながら、一方では、古代から民衆の生活の中にあった娯楽としての音楽や舞踊のもつ偉大な力も見過ごしてはいなかった。芸術の人間にとっての本源性への認識からであろう。以下、スミスの生きた18世紀イギリスに広く存在し、人々の生活の中で大きな意味を持っていた民衆娯楽について検討したい。

### III 18世紀イギリスにおける社会と芸術との関係の検討

ここでは、スミスの生きた18世紀イギリスにおける芸術や民衆娯楽というのがどのような社会・経済システムであったかについて考察する。そして、それが資本主義的農業の発展と都市の工場制度によって衰退していった過程を芸

20) 水田洋「アダム・スミス研究入門」未來社、1954年。によれば、国富論出版の1776年頃は、新時代の胎動を示す様々な事件が相次いだ。1773年にはボストン茶会事件がおり、1780年には、ついに、18世紀のうちで最も激しいロンドンの暴動である（ゴードン暴動）が起こったとある。（136-144ページ）

術や娯楽の社会・経済システムの転換として、また、共同財の崩壊過程として捉えてみたい。

#### (1) 18世紀イギリスの民衆娯楽

##### ① 農村における民衆娯楽

18世紀(1780年頃まで)のイギリスでは、農村においても都市においても豊かな文化や娯楽が存在した。それらは、ウェイク(教区の毎年の例祭・9月の後半から11月の初めにかけて行われ日曜日から週の途中まで続く、宗教的性格は薄れていた)、フェア(年に1度か2度の定期市)、雇い人市(奉公人を雇い入れるための法定の集いだが社交の場として機能していた)、収穫後のフェアや祭、クリスマス、復活祭、メイ・デイ、聖霊降臨祭等季節ごとの祝祭として広く行われていた<sup>21)</sup>。農村における民衆娯楽の基盤をなしていたのは生産と生活の基盤としての村落共同体であった。つまり、労働と娯楽が生活の中にまだ一体のものとして存在したのである。芸術も農村にあっては、沢山の娯楽の一部として存在した。マークムソンによれば「当時の民衆の娯楽は、社会生活の制度化された一側面にすぎず、伝統や慣習の一部として」存在したのである。

「民衆にとっての競技場は、日常生活の中にある素材=マーケット広場、一般街路、教会の境内、すきに入る前の開き地、囲い込まれていない耕地=からなりたっていた。」から「外部のものには、それが娯楽の場であるとただちに識別されることはなかっただろう。」という<sup>22)</sup>。最も大きな娯楽は季節ごとの祝祭であった。つまり、娯楽は共同体における社会制度の一つであった。この制度は近代的制度ではなく慣習としての制度であるが、2つの階級間の均衡点としての合意の上に成立していた。「慣習的な行事がさかんであるためには、それが一般の民衆によって維持されているだけでは不足であった。権力をもつ

21) Robert W. Malcolmson, *Popular Recreation in English Society 1700-1850*, 1973, 川島昭夫・沢辺浩・中房敏朗・松井良明訳「英国社会の民衆娯楽」平凡社、1993年、を参照。

22) 同上, p. 1, 川島訳13-14ページ。

人々によって承認されるか、少なくとも容認されていることが必要だったのである。」「そこに含まれる慣習が、ジェントルマンの行動の自由に対してある種の制約を課していた。それが、慣習的な特権、民衆が自分たちのものとして主張する権利であったからである。」<sup>23)</sup>「伝統的な民衆娯楽には、まったく自律的に行われ、社会的な相互依存という民衆自身の文化にその根を深くおろしているものもなくはないが、大きな権威を有する人物、通常はジェントリの庇護や関心や黙認に少なくとも一部は依存していたものが多い。」「パトロネジというものは、伝統的に、支配階層にとっての大切な社会的役割の一つであった。そしてそれは社会における多彩な行動領域にまで拡大していた。非常に多くの娯楽行事の背景に、それを支える誰かりっぱな人物の威光や寄付が存在し、それはしばしばはっきりと目に見えるよう誇示された。ジェントルマンはスポーツや競技や農村の遊戯に賞金を提供することもたびたびであった。」<sup>24)</sup>「慣習のなかに、民衆の特権の主張とそれに対する承諾とが内在しているということである。」<sup>25)</sup>そして、こうした娯楽の持つ活気を内側から支えたのは若者たちである。「娯楽行事に若い人たちの参加がめだつた理山のうちでもっとも重要なのは、そうした行事が求愛や、異性とめぐりあいの機会となっていたことである。」<sup>26)</sup>やがて、資本主義的農業の発展と都市の工場制度がこの均衡点としての合意を内部から掘り崩していくことになるが、この時代のジェントリはまだ一般民衆の近くにいた。「彼らは、しばしばイングランドの地方の素朴な文化から、ロンドンに基礎を置くコスモポリタンのでソフィスティケートされた文化に至る道の、途中の家の住人であった。」「これは彼らが一般民衆と共有する特徴であった。17世紀後半、18世紀前半の演劇に、まのぬけた地主がひきもきらず登場するという事実は、そうした性格づけが現実どおりであったということではかならずしもなく、思考や行動の様式が、農村の生活の経験に深く根ざし

23) 同上, p. 67, 川島訳147ページ。

24) 同上, p. 56, 川島訳127ページ。

25) 同上, pp. 110-111, 川島訳230ページ。

26) 同上, p. 54, 川島訳122ページ。

ているようなジェントルマンが事実として数多く存在したということを示している。上流の経験と、民衆の経験が重なりあう点が存在したのだ。<sup>27)</sup>これは、娯楽と芸術が比較的近い距離にあったということも意味する。娯楽が芸術との接点を持っていたのである。

つまり、18世紀イギリスの農村における民衆娯楽は、生産基盤と生活基盤を有していた村落共同体の中で、2つの階級の間で合意としての慣習という、制度としての共同財<sup>28)</sup>であったということが出来る。そこでは、ジェントリのあり様の中に娯楽は芸術との接点を持っていたのである。

## ② 都市における芸術と文化

18世紀イギリスの都市も芸術と優雅の地であった<sup>29)</sup>。商品の大量生産で職人芸と趣味を破滅させたり、雇い主と雇い人を厳密に区別する工場制度はまだ本格的には発展していなかった。大部分の賃金労働者はすぐれた職人であり、その教養、暮らし向き、社会的地位は小規模な雇い主や商店主と比べて見劣りしないものだった。芸術家と職人はまだ未分化だった。地方に散らばる何千の貴族が芸術のパトロンとして機能し、ジェントルマンの邸宅が王権に代わって学問と趣味の中心となった。更に、18世紀の前半は、経済上の諸条件のおかげで労働者が相対的に豊かであった。富と余暇は増大し、広範な諸階層に行き渡っていた。国内の平和と個人の自由は、以前のどの時代より強固であった。後の時代の方がたかさんの賃金を受け取ることになるのだが、この時代の方が農村においても都市においても自然や文化を豊かに享受できた。絵画、彫刻、家具や装飾品などの芸術は日常の生活に商品としても浸透していた。芸術的な家屋や家財道具は決して高い価格ではなかったし、商品も量より質が優先されたからである。また、農村においても後の時代の新興住宅が持ち得ない自然の景観

27) 同上, pp. 68-69, 川島訳149-150ページ。

28) 共同体において、共有されていた財を共同財と呼ぶこととし、近代以後の公共財やクラブ財とは区別して扱う。

29) G. M. Trevelyan, *English Social History A Survey of Six Centuries Chaucer to Queen Victoria*, 1944, p. 396, 松浦高嶺・今井宏訳「イギリス社会史」2みすず書房, 1983年, を参照。

から受ける味わいや豊かな娯楽を持っていた。

こうした社会経済的条件のもとで、18世紀イギリスでは劇場が一般の人気を集めて活気に満ちていた。「チャールズ二世のもとで復興した当初においては演劇活動はまだロンドンに、それも宮廷の庇護のもとに限られていた。それが今や幅広く各地にゆき渡るようになったのである。比較的大きな地方都市には劇団が結成され旅役者たちはたえず地方を巡回して、穀物倉庫や公会堂で田舎の観客を前に芝居を演じた。」「しかも、彼らはときにはハムレットや乞食オペラなどの名作を上演した。」<sup>30)</sup>「18世紀という時代にとって、劇場はまことに重要であった。コベント・ガーデン劇場は、1732年には1週あたり1万4千人以上の観客を集め、1762年には2万2千人以上を集めた。1700年から1750年の間に1095の新しい劇が誕生し、1750年から1800年の間には2117の劇が生まれた。」<sup>31)</sup>演劇は18世紀の芸術と娯楽の重要な構成要素であり、産業社会以前のこの時代の劇場や舞台芸術はまだ儲けることが可能であった<sup>32)</sup>。

18世紀イギリスの都市文化は、地方に散らばり農民と共に暮らすジェントル

30) 同上, pp. 410-411, 松浦訳338ページ。

31) Richard B. Schwartz, *Daily Life in Johnson's London*, 1983, p. 57, 玉井東助・江藤秀一訳「十八世紀ロンドンの日常生活」研究社出版, 1990年, 85ページ。

32) 前出, ボウモル&ボウエンの「舞台芸術と経済のジレンマ」によれば、「18世紀には、エリザベス時代または今日と比べると、入場費用は職人の所得のうちのはるかに高い割合を占めていた。それにもかかわらず、働く人々は、演劇を愛してきたように見える。それは、演劇の価格という一点をめぐって、人々が激しく長期にわたる暴動をおこしてきたほどに、強いものであった。」という記述がある。(331ページ) また、「十八世紀ロンドンの日常生活」にも、「ドルアリー・レーン劇場で、ジョンソン作『アイリーニ』を見るための費用は次のとおりである。ボックス席5シリング、平土間3シリング、2階棧敷2シリング、天井棧敷1シリング。芝居を上演するためには、次のような費用がかかったと思われる。オーケストラ1晩あたり18ポンドから20ポンド。ろうそく3ポンド。劇場付きの床山に5シリング、入場券販売員に2シリング6ペンス。武装した守衛の人権費が1人につき15シリング。支配人に、1日に付き3ポンド6シリング。劇場使用料1ポンド。広告費に3シリング6ペンスかそれ以上。それでも1晩100ポンドの利益をあげることができた。劇場は、職業作家にとって金もうけのまたとないチャンスとなった。」(77ページ) とある。「当時、職人の日給は3シリング位であった。ドルアリー・レーン及びコベント・ガーデンは1737年の法律で免許をうけたイギリスで唯一の劇場であったが、両劇場の最も安い座席入場料でも1シリングした」(「舞台芸術と経済のジレンマ」331ページ) のである。ところが、「産業社会になって、他の産業の生産性が上がると舞台芸術の所得不足が年々増えていくことについての詳しい分析は、ボウモルとボウエンが前出「舞台芸術と経済のジレンマ」の中でやっている。



マンを通じて農村生活との接点も持っていた。

## (2) 民衆娯楽の衰退にみるシステムの転換

資本主義的農業と大工場制度はジェントルマンと雇人の距離を大きくした。システムの転換は、18世紀において娯楽と芸術の接点の役割を果たしていたジェントルマン自身が土地の囲い込みによって農民を追い出すという出来事によって象徴される。もはや、ジェントルマンと農民の間に同感はなく、同感に支えられた慣習は崩壊し、それに支えられた民衆娯楽を衰退させる。共同財としての娯楽の衰退と芸術と娯楽の乖離が始まったのである。この衰退は1世紀にもわたる緩やかな変化であった。

農村においては、大土地所有によるジェントルマンと農民の経済的格差が彼らの生活を隔てていった。そこでは、ジェントルマンが農民に譲歩する必要もなく慣習と民衆の特権はその基盤を失っていったのである。この時期、ジェントルマンの文化と民衆の文化との間に堅牢な障壁が発達した。都市における工場制度は農村の仕事から農具作り、仕立て屋、粉屋、家具作り、織布工、大工、建築業など職人の仕事を駆逐していった。小規模工業や手仕事の数が減ってしまった結果、農村生活は以前より活気を失い、住民の気持ちや郷土への関心も満ち足りたものではなくなった。農村の活力は都市がその血と頭脳を吸収するにつれ減退して行ったのである。それに加えて農村の娯楽の主たる担い手であった青少年の都市への移動が拍車をかけた。また、土地の囲い込みによって共同の楽しみの方が失われていったことも民衆娯楽衰退の大きな要因である。このオープンスペースの喪失は都市においても同様であった。都市の急成長は多くのオープンスペースの取用を伴ったからである。

都市においても大工場制による商品の生産によって職人仕事が減少し、商品の質の中にあつた芸術性が生活の中から失われていった。職人仕事の減少は芸術と労働の分離をも意味する。雇い主と雇人の間には障壁が発達し雇人の暮らしや心持ちはミスが分業の弊害として述べた様な状態になっていった。こう

した傾向はやがて都市問題を発生させる。雇い主は娯楽を工場での規則的な労働の障害物として排斥した。芸術を内に内包したあの豊かな民衆娯楽の基盤としての慣習はもはや都市では再構築されなかった。慣習は小さく緊密に結びついた共同体のしるしなのである。大きくて人の移動が多く人々が匿名で暮らす都市は慣習の基盤にはなり得ない。

民衆の余暇の性格の大変貌は1780年からおよそ100年の間に起こった出来事である<sup>33)</sup>。「民衆娯楽の衰退は現在私たちが伝統社会と呼ぶ社会がしだいに崩壊したと明らかに深く関連していた。市場経済が勃興し、それに伴って社会関係を指導する新たな規範と物的条件が発達するにつれ、多くの伝統的な行動の基盤は容赦なく掃討され、あとに真空を残した。」それらが「都市を中心とし、契約関係によって支配され、個人主義に傾き、文化が工業生産の必要にふさわしいありかたにますます成型されていく社会に、すんなりと吸収されることはありえなかった」<sup>34)</sup>「19世紀の大部分を通じて、一般民衆の手に与えられた代わりの娯楽がきわめて限られていたことを示すのが、民衆の娯楽センターとしてのパブの圧倒的な重要性である」「19世紀の2番めの4半世紀は伝統文化の多くがばらばらになり、新しい可能性はまだ芽をあらわしたばかりの頃である。民衆の余暇が再編されたのは、1850年以後の現象である。」<sup>35)</sup>

明らかに娯楽や芸術もそれが存在する社会経済システムにそのあり様を強く規定されている。共同体の慣習と職人による芸術的質を持った労働というシステムに支えられた18世紀イギリスの民衆娯楽は資本主義的商品生産によってその基盤を失っていった。その変化は娯楽と芸術の乖離、労働と芸術の乖離、生活と娯楽の乖離として進行していった。共同財としての娯楽や生活が持っていた豊かさが私的財の中にすべて再現されることはなかったのである。

33) 前出「Popular Recreation in English Society」p. 170, 川島訳339ページ。

34) 同上, pp. 170-171, 川島訳340ページ。

35) 同上, p. 171, 川島訳341ページ。